

「墓穴探掘道中記！」

◎台本の初稿です。

◎台本なのですが、やや、シーンのメモをつなげたものだと思って、お読みください。
↓次のタイミングで、改めて、シーンの間に入る台詞や段取り（ト書き）を配ります。
◎こちら、上演時間は60分のバージョンのものです。

☆ゾンビちゃんと学者のミニコントが入ります☆

一面をごつごつとした岩肌で囲まれた、洞窟。

沈黙。静謐な空気が辺りを覆っている。

ひとりの男が、フラフラと其処へやって来る。

名を堀内という。

するとそこに、怪しげな2人組が現れた。

蛇1&2「神は死んだ。かどうかは分からない。そして、お前の歩みが往きか還りかも分からない」

堀内「ここは一体どこなんだ？」

蛇1「ここは、安住の地に非ず」

堀内「出て行けるのか。だったら通してもらおう」

蛇2「いいとも、案内しよう。もうすぐ地上だ」

堀内「よかった」

蛇1「でも、何か物足りなくないか？ お前、自分の名前、憶えてるか」

堀内「俺は堀内……。しっかり覚えてるさ、堀内だ！」

蛇2「ふうん。で、他の一切合切は？」

堀内「……あれ!？」

蛇1「お前は半身を、地の底にいる、ある女に奪われている。片身分け、されちゃつてるのだ」

蛇2「うちらは、地の底、泉のそばでふらふらしてる、そのふざけた天女に用事がある。でも、自力じゃたどり着けないの。だって、うちらは蛇。二匹の善良な蛇」

蛇1&2「お前に案内してほしい……」

堀内「……俺は再び、地の底に戻らなきゃいけないのか」

蛇1「そゆこと。地上で仲間を連れてこい、皆で穴掘りだ！」

蛇2「三日したら迎えに行く！ 行くぜ、地の国。黄色い泉」

蛇1「行くぜ、根の国。黄色い泉」

蛇1&2「出口は、あれだ……!!」

埋田という男が現れる。

埋田「古い友人に呼び出された。今どき手紙で。古風だな。送り主の名は、堀内。見せたいものがある、ぜひ来てくれ、と。俺、別にこいつと親しくないんだよな。正直、顔も思い出せない……！ そんなこんなで、某県某所、山奥のさびれた村にやってくる、真面目な男、埋田くんなのでした。前回会ったの、いつだっけ……？」

埋田、葬式にぶち当たる。指さす“あの”マークがある。

埋田「や、指さされてる場合じゃないだろ！ え、あつちで？ ……嘘。葬式やつちやってるよ……堀内くんの……」

医者「あ。故人のご友人の方ですか？」

埋田「え、マジで堀内くん、……死んじやったんですか！？」

医者「はい。では、あちらへ」

埋田「うわあ。嘘だろ……」

堀内の葬儀が、しめやかに行われている。

埋田の訪れたこの地は、何処とも知れぬ架空の土地なので、あらゆる要素の混じった、無国籍風の葬式が、皆の手によって行われている。

その場にいる者たち。

墓守り：墓掘りも兼ねている。

詩人：葬式に際して、詩を詠む役どころ。

カナリア：詩人の周りについてまわる、泣き女的キャラクター。

医者：生死を判定する。

墓守り a 「どれ程の墓穴を掘れば良いか。深く、大きく」

墓守り b 「彼への思い込めて、シャベル振り上げ。その想い尽きるまで」

埋田「うわー、困ったなー。なんで？ わざわざ、遠路はるばる」

医者「どうしました、この辺で見かけぬ人」

埋田「呼び出されて来てみれば、今まさに死んでるとか言ってる……」

医者「残念ながら真実その通り。医者である私の所見によりますと、医学的な死の徴候は全て満たして、ばっちり死亡判定が出ております」

埋田「あ、お医者さん？」

医者「私はね。ま。でも、あれはあなたが見たって分かるでしょ」

埋田「ええ、まあ……。……なんか、ジャストだっただけに悔しいなー。どーしよ、メチャメチャ困る、っていうか、何が見せたかったんだよー」

医者「ご愁傷様です」

埋田「うわー。すげー困る……。あいつ、何とかして、生き返んねえかなー……。皆「ええっ！！」

埋田「はいっ!？」

沈黙、埋めていた人々手を止め、埋田へ振り返る。そして、顔を見合わせて。

カナリア「あ、そっちいくの？」

墓守りb「半分くらい埋めちゃってたのに」

詩人「私、ちよっと泣ける詩とかよんじやってたのに」

墓守りa「はい、じゃそっち持って、日暮れる前にやっちゃうよー!」

埋田「あいつらは、え、突然何をしてるの？」

ゾンビ♀「先生!先生!」

学者「どうした!」

ゾンビ♀「あいつら、あっち持ってく。儀式、やる気だ」

学者「よーし、よしよし! ゾンビを生み出す、あの秘術だな。いいぞいいぞー」

ゾンビ♀「また、あたしの仲間が生まれちゃうのか……、切ないねえ……。つて、待って、置いてかないで〜!」

埋めかけていた堀内を持ち出し、慌ただしく別の所へと運び出す人々。

いつしか、不気味な感じに照明が変化。

夕暮れ、二人だけで、穴を掘る。

不穏な儀式をする二人。

墓守りa「小石の並びが、文字に見える時がある」

墓守りb「何やら柔らかめに埋めてみる」

墓守りa「地面が、生き物の血を吸っているような気がする。夕暮れの森の奥、薄気味悪くて、さっさと片そうとしてるのに、全てを済ます頃には」

墓守りb「知らず、いつも辺りが真っ暗になっている」

墓守りa「早く帰りたい気持ち」

墓守りb「二人でどうにか押さえ合い、最後に祈る」

墓守りa & b「蛇のように執念深く、墓穴より現れよ。堀内という男……!」

暗転。所変わって。

埋田「葬儀。この街の方々に、善意でして下さったんですよ。ありがとうございます。す」

カナリア「いえいえ。(葬儀の後、村の寄り合い所のような所で)」

詩人「この辺はみんなそうやってるんですよ」

医者「堀内さん、もうしばらく、ここに住んでらしたから」

埋田「あ、そうなんですか」

詩人「ええ、もう立派にこの人って感じで」

埋田「はあ。いやもう最近の彼を全然知らなくて」

詩人「あの、失礼ですが、堀内さんとはどういうご関係で？」

埋田「あ、僕、埋田つていいいます。あの、古い友人なんですよ。親友つていうんですかね？（かなり白々しく）」

医者「へえ。あ、この度はご愁傷様です。堀内さん一度、お亡くなりになってしまいました。まあ、そうお気を落とさずに」

埋田「あつ、いや別に大丈夫なんで……。つて、そんな言い方しちゃ駄目だろ。えーと、いや、大丈夫じゃないです……。……しかし困ったな」

墓守りb「いや。だから困んねつての（墓守りの二人、帰ってきた）」

埋田「あ、どうも」

墓守りa「後で直接聞きなさいよ」

埋田「はい？」

カナリア「まあまあ、内緒にしておいて、それで、すっごくビックリした方が」

埋田「うい？」

詩人「訳わかんないでしょ、それでいいから。この村独自の、秘術でね。むふふふ……」

墓守りb「しーっ。まだ内緒、内緒。じゃあ、ちょっと呑みますか」

医者「ですね。そうですね」

カナリア「故人を偲んで」

墓守りa「一つ盛り上がっていきましょよ」

詩人「埋田さんも、ね」

埋田「ええ？ どうしようかな……。じゃあ、ちよつと。一杯だけ」

埋田「三日三晩騒いだ。もうおいとまします、本当、帰ります」

ヒト「もうちよい待ちなさいよ。まだ呑めるでしょ？」

埋田「いや、もう居ても、意味とか無いつすもん。（服を引つ張られ）なんで、そんな引つ張るんですか！」

カナリア「あーっ」

皆「カナリア、どうした」

カナリア「ヒトの気配がする！」

皆「えっ」

カナリア「でもね、“死の匂い”が纏わりついてる！」

皆「おおう」

墓守りa「ということとは……」

墓守りb「来たんじゃない？」

ヒト「はい、みんな拍手！」

ドアの外に、ゾンビとして復活した堀内が立っている。凄惨な外見。ゾンビゾンビしながらも、どこかユーモアのある姿。

このメイクと装飾には、是非力を注ぎたい。
普通の人々とゾンビが、当たり前前の様にコミュニケートしているのが、この芝居の肝だからである。

堀内「やあやあ、村の皆さん、お久しぶり。ここはどこですか？　おう埋田、来てくれたんだ。ところで、俺は一体誰なんだろう？」

堀内は、ゾンビとして生まれ変わる際、地の底に何かを忘れたせいか、様子がおかしい。
あまり会話が噛み合わない。

埋田「久しぶり、堀内」

堀内「久しぶり、埋田くん」

埋田「ずいぶん変わったな」

堀内「そうか？　前のことがあんまり、思い出せないからなあ」

埋田「いや、だいぶ変わったよ……。手とか、とれるみたいだし」

堀内「目もね、とびだすよ（実際にやってみせる）」

埋田「こっちは、それ見て心臓が口からとびだしそうだよ」

堀内「お。ゾンビ以上だね！」

埋田「ユーモアだよ。まあいい、なあ堀内。提案があるんだ」

堀内「俺も実は、思っていることがあるんだ」

埋田「そうか。じゃあ、まず、俺からな。一緒に、お前のお墓まで行かないか？」

堀内「行つてどうする」

埋田「墓穴をさらに、さらに、下まで掘つていこう。地の底ぐらいのところまで行つて、それから、お前の今後について考えよう」

堀内「おお！　俺も同じこと言いたかった。地の底に行きたいんだ」

埋田「……付き合つてやるよ」

堀内「そうか、悪いな」

埋田「なあに、親友だろ」

堀内「（固く握手・そしてハグ）俺たち、親友だったのか？」

埋田「……たぶん。……違つたっけ？」

堀内「適当なこと言つてんじゃねえ！」

埋田「すつ、すまん」

堀内「なあんてな。俺も全く憶えてないんだ。ダハハハ」

埋田「この野郎……。お茶目な奴め」

堀内「ドウワハハハ」

埋田「ゾンビになつたこと、ショックか？」

堀内「なつちまつたもの悩んでいても、無意味だろ？　いつまでも腐つてたつて、しようがないさ。……上手い！　カーツ、腹がよじれる、腸がとびでる！　いてえ！（埋田に突っ込まれる）」

埋田 「不謹慎すぎる！ まあいい。そうと決まれば、行くぞ！」

村外れの墓場、墓守りが退屈している。

墓守 a 「王手」

墓守 b 「あ、それロン」

墓守 a 「くー、虎の子の桂馬が」

墓守 b 「リーピンイーペーでザンクで」

墓守 a 「もう一回もう一回」

墓守 b 「・・・暇な訳ではないけど、退屈だな」

墓守 a 「それでこそ墓場、それでこそその墓守り」

堀内ら到着。

墓守 a 「……！ 初めてだよ、戻ってきたやつは」

堀内 「俺の墓ってどこかい？」

埋田 「ほりほり、堀内くんの墓に行きたいんだけど」

墓守 b 「どうぞ。そこだよ。他所も墓参りに来てっから。余りうるさくしないように」

墓守 a 「感心だねえ、一度出て行ったのに墓参りかい」

堀内 「ウム。なあー！ よいしょー！（突如、墓石をぶっ壊しはじめるゾンビ君）」

墓守 a 「ちよつと何やってんの！」

墓守 b 「穴掘んな、墓暴くな！」

学者 「よし。掘るの一緒に混ぜてもらおう！」

墓守 b 「お前ら混ざるな！」

泣き崩れる家族達（巻き添えで墓を壊されて、暴かれて。泣くしかない）。

墓守 a 「墓、なくなっちゃったよ……」

学者 「丁寧になー、慎重になー。土は恋人、土は母。優しく掘るんだぞ」

ゾンビ♀ 「つぼ出てきました、骨入ってます」

堀内 「棺です、すっげえ臭いです」

ゾンビ♀ 「土に還すな日にさらせ」

堀内 「土は結局暴くもの」

ゾンビ♀ 「先生、ほんとにこの下になんかあるの？」

学者 「それをこれから調べるんじゃないか！」

医者・詩人・カナリア・墓荒らし、が現れる。

医者・詩人・カナリア・墓荒らし「おまたせー」

堀内 「待ってました！」

埋田「お手数掛けます」
医者・詩人・カナリア・墓荒らし「いえいえ。もう、立派にこの人、って感じだったんですから」

蛇たちも現れる。モグラ長とモグラ部下もついて出てくる。

蛇1「約束の三日だ。おうおう、ずいぶん大所帯で帰って来たな。おりこうさんだ。さてモグラくん、おしごとだ」

蛇2「自己紹介しなさい」

モグラ長「こんにちは。俺はモグラの長、モグラ長だ。二匹の蛇に呼ばれて来た」

蛇1「モグラの力をかりましょう」

蛇2「そして、人にはとても到達できないぐらい、下の世界に行こう」

蛇1「モグモグー」

モグラ部下「モーグ、モグモグー」

蛇2「モグー！」

モグラ部下「モグーリ、モグーリ」

言葉を話す巨大な架空のモグラが、現れる。

彼はカナリアと呼ばれていたたりする人間とは違い、物語に登場する、唯一のファンタジックな生き物という設定。

堀内「みなさん。ありがとう！ こんな俺のために、穴掘り珍道中につきあってくれて！」

医者「いえいえ。死んだか判定するのは、やはり医者のととめ」

詩人「そして、死んだら、葬儀のときに詩を読んでもくれる奴がいなきや」

カナリア「そしたら、君の脇で大泣きしてくれる、カナリアみたいな声の泣き女も欲しいよね」

墓守り二人「墓を整え守ってやる、墓守りもいる」

学者「ゾンビの生体が研究テーマ。混ぜてくれたまえ。ああ、調べたことはいずれちやあんと還元するから」

ゾンビちゃん「先生は可愛いゾンビちゃんの私だけ、見てくれたらいいのに。……ジエラシー感じちゃうわ。ふん。よろしくね、新米ゾンビくん」

墓荒らし「そーつとついてきや、ついてることにお室に巡り合えると信じて。墓荒らしの一人ぐらい、面倒見てくれよな、兄さん」

埋田「旅は道連れ、世は情け。気がつきやあばいてる友の墓穴。墓穴にならなきやいいけれど」

蛇1・2「そうして、モグラと村人従えて、堀内くんと埋田くんは、墓を掘り返していく！」

堀内の墓が元あった場所を、その場に居合わせた全員で、掘り返してゆく。

その巨大な穴へ、人々吸い込まれるように消えて行く。

ジャクソン5の曲に合わせ、軽やかに穴を掘る。ダンスをする。

全員「もっと深く！ もっと下へ！」

人々、地中へ。(ここまでで15分、全体の4分の1程度)

皆で輪になって、地上を見上げ、仰向けに寝転がっている。

ゾンビ♀「掘ったなー」

埋田「掘ったねー」

ゾンビ♀「ま、そんな奥深い所まで掘ってこられたのも」

詩人「モグラ長とモグラさん達のおかげ！」

カナリア「ホントにいたんだ。喋れるモグラ……！」

墓守b「え、どんなことしてる人なんですか」

モグラ長「穴とか、掘りたいんですよー。すごく」

医者「んー、土の中歩くみたいにすすい進んできたもんね。いや、びっくり」

モグラ長「あ、それはやつぱ、他のモグラも居たからこそなんでー、そっちもほめてあげて」

墓守a「あー。モグラの、長、ってことだもんね」

ゾンビ♀「暗闇で、色々動いてた影は、あいつらか」

モグラ長「そうそ」

学者「ほら助手。早速目の前の資料、かたしていくぞ。そっちもつとけ」

ゾンビ♀「ヤー！」

蛇1「さあ、どうだ。お前がやって来た地の底は、ここいらか？」

堀内「（首を振って）全然ですね。この程度の深さじゃ、又俺、出てきますよ！」

埋田「謎の逆ギレ！？ ……何故凄むんだよ」

蛇2「モグラ長。もっと下だそうだ。ていうか、何でここで急に止まったのよ」

モグラ長「それはですね。急に掘り進めなくなったの。ここいらにある、障害物で」

一枚の石版がある。モグラ長、そこに頭突きを試みせる。

墓守a「何？」

墓荒らし「石版？」

モグラ長「ふるーい墓石」

蛇2「墓石？ これ」

医者「ああ、文字掘ってある。享年なんとかて。あと、ここに安らかに眠るゝて」

蛇1「まあ、邪魔っちゃ邪魔か。いちいちどかさなきゃならないし」

埋田「でもここから先行かないと、ねえ」

堀内「じゃ、どかそう。手伝うよ、俺たちも」

皆「よし。いっせーの……」

モグラ長「（慌てて止めて）違う違う。この板一枚でも抜いたら、土の中の危ういバ
ランス一気に崩れて、みいんな、埋もれ死んじやうの」

一同「あー（納得。石板をそおとと元に戻す）」

ゾンビ♀「抜いてみつか！ これウゼエし！（一同とは少し別の所で）」
学者「おいこら馬鹿ゾンビ娘、勝手に触るな！ 全く……、そういうのは、私が一通り見て回ってからだ」

ゾンビ♀「ういっす、師匠。……何か書いてある？ 彫ってある？」

学者「えーと。……お前と同じで、もはや地表での役目を終えた、そんな墓石達だな。

まあ、だいたいが読むのも面倒臭いっていうか、読む価値の無いものかな」

ゾンビ♀「へーえ」

学者「ただ……、私の素晴らしい言語能力をもつてしても、なかなか読み解けぬ一節が、どの板にも記されてるんだ。……こりゃ、何だ？」

モグラ長の帰りを待っていた、とても可愛いモグラたち。無垢である。

出演者皆でモグラたちは演じられる。

モグラ長「みんなありがとなー。あの人ら、まだ掘ってもらいたいみたいだから。じやあ、この場で待機。爪とかの手入れしとけー。あと隊列の確認な」

モグラたち「はい」

モグラ長、去る。残ったモグラ達、はじめはモグモグ言ってるが、段々言葉に聞こえてくる。

モグラ部下「上の世界って行った事あるひとー？」

モグラ「わけないじゃん。まぶしいのに」

モグラ「辛いよね、まぶしいの」

モグラ部下「でもね、その代わり。穴掘らずに前、進めるらしいよ」

一同「へーえ」

モグラ部下「土をね、かきわけたりしなくていいの」

一同「うひゃー」

モグラ「なんか面白味の無い世界だな」

一同「うんうん」

モグラ部下「穴を掘るのが、三度の飯より好きな、うちらからしたら……」

一同「信じられない」

モグラ「でもさ。そう考えると、土にまみれて曲がった爪も。薄汚れてかっこ悪く曲がった背中でも、上下左右自由に土の中を掘り進める、うちらみたいなモグラが、生きて一番楽しいのかもね」

一同「なんだか、良い結論がでた。ふふふ……」

蛇1&2「おーい、堀内君、埋田君。ちょっとこっち」

堀内「何ですか。得体の知れない、どこかで会った人」

埋田「そうそう、聞きたかったのは、この人はどういつながりの人なの」

堀内「僕とどこかにつながりましたか」

埋田「えー!? (何ソレ)」

蛇1&2「大丈夫。君の事はとても大切に思っている」

堀内「安心していいみたい」

埋田「言われたこと丸のみしちゃうんだ!？」

蛇1&2「信用してくれたまえ」

堀内「信用していいみたいよ」

埋田「信用までしちゃったよ!」

堀内「お前も、この人たちのこと信用してくれるよな!」

埋田「信用を強要されちゃったよ!」

蛇1「説明しよう。ほんの三日ほど前、お前さんと出会い、地上へと手引きしてやった」

蛇2「そして今度は連れ帰って欲しいんだよ、そのどこかの、もうちょい先まで」
埋田「どうも、うさんくさくて、怪しいんだよな……」

蛇1「……まあいいじゃないか、とにかくこっちだ。そこ、危ないから」

墓荒らし「あれ、あいつら何処行っただの?」

詩人「ほんとだ」

カナリア「あーっ! (悲鳴のようにカナリアが泣く)」

医者「カナリアどうした」

カナリア「ねえ、オウム。ここ今すぐ離れよう。すぐ近くまで来てる」

医者「何が?」

詩人「匂い?」

カナリア「うん。それも、すごく強い」

墓守a「毒ガス?」

墓守b「空気がよどんだり、薄くなってきたり?」

詩人「違う、匂いは匂いでも、死の匂い」

カナリア「そう。みんな死ぬ! たくさん死ぬ! 一度に死ぬ!」

一方、石版の近く、学者とゾンビ♀は相変わらず調査していた。

学者「よし。駄目だ。読めねえ」

ゾンビ♀「っ早っ。その後ろ向きの前向きさがステキ。だったら、持って帰ってゆっくり調べましょーよ」

学者「お前今いい事言った。引っこ抜くぞ、そっち持て!」

ゾンビ♀「ヤー」

地響き。悲鳴。断末魔の叫び。モグラたち、潰れて死んでいく。

学者&ゾンビ♀「ええーっ!?!」

モグラ長「仲間の元へ戻ってきて、俺は見えない目をむいた。ウワー！ 仲間が土砂崩れに巻き込まれてるー！ モグラが、救いの無い土の濁流に飲まれて溺れ死んでるー！ モグラが岩々に体中の骨砕かれて、小さな肉のカタマリにー！ モグラが、石盤が、四方から押し寄せて、真つ二つになって、叩き潰されて、ウワー！ 地獄だ！ まさに地獄絵図だモグー！ 誰か、誰かモグー！ 助けてやってくれモグー、なんとかしてモグー……！」

ようやく、大地震が収まる。一同、仲間が死んで激しいショックを受けているモグラ長の元に。

墓守 b 「よっぽどショックだったんだろう。こんなにたくさん仲間が一度に……」
墓荒らし「ショックのあまり、人間の言葉と、モグラ語が混ざってたからねえ……」

医者「……そつとしておいてあげましょう」

詩人「先生」

医者「ああ。（医者、穴の奥のモグラの死体を見て回りながら）これも駄目です。ぴくりともしない。これも……、あれも、それも、もうとうに手遅れ。穴の奥に寝るモグラたちの四肢はまるで岩、固まってしまってる。……駄目ね」

墓守 a 「これは、うーん」

墓守 b 「全滅、かなあ」

墓守 a 「しようがないよね。あんな土砂崩れで助かるモグラなんて……」

墓守 b 「（隣に耳打ち）あのさ、もういっぱい穴あいてるじゃない。掘んなくていいから、ちよつと楽だね」

墓守 a 「あー、土かぶせるだけでね。石とか良いカンジに積んで、ちやつちやつてな」

医者「じゃあ。地中にはありますが、お葬式をしましょう」

堀内「さあ詩人、詠んでくれ。オウムを真似て、亡き者の心を真似て。（胸に手を当てる。一人だけ深刻そうに）」

詩人「えーと、じゃあ、いきまーす……。我々モグラは。皆一度に死んでしまった。でも幸せだった。やり残した事は、たくさんあったが……。もう、いいじゃないか、幸せかもしれない……。 （詩人がすごく雑に死者を吊う詩を詠む）」

カナリア「えーん、えーん……。ねえもう、早く次行こーよ。皆無事だったんだしさ」

皆「そうだな」

堀内、突然墓守たちに頭突き、カナリアを突き飛ばし、詩人に掴みかかる。

堀内「ちゃんとやれよ！ なあ！」

詩人「なんだい？ 急に」

堀内「俺たちが想像してやらないで、どうすんだよ。モグラの届かなかった景色を、そのめしいた目に飛び込んでくる筈だった日の光を。飲み込まれ、土まみれになった視界を」

カナリア「だって人間じゃないよ。たかがモグラじゃん」

堀内、詩人を驚ぶかみにしたまま、カナリアに殴りかかろうとする。

カナリア「なにさっ!? ええっ……!?!?!」

埋田「こいつ今、たぶん女でも平気で殴るタイプ。よく分かんなくても、ちゃんとやったほうがいいよ。(胸に手を当てる。皆もそれにならう)」

ゾンビ「みんな、良い奴ばっかだな。死んだ奴に気を使ってくれて」

皆「いえいえ……」

堀内「こんな素敵な奴らばかりが周りにいるなら、これから、もし俺が死んだとしても、安心だ」

皆「いや、あなた、すでに……」

堀内「ん?」

皆「いえ……」

皆、仕方ないので、今度は真剣に葬儀を始める。

詩人「いつから掘っていたんだっけ。身体がきしむ。報われない。何処にも着かない。いや、駄目だ。自分一匹がそんなこと考えて進んでたら置いてかれる。考えずに掘り進め。……来るかもしれない、いつの日か、我々がその苦役を休むことを許される日が。……ああ、どうやらそれが今のようだ。それがこの場所のようだ、それでは……」

カナリア「あーっ (悲鳴)」

医者「今度はなに!」

墓守り a & b 「ちよっ、しっかり!」

ゾンビ♀「来る来る、来る来る。(学者とゾンビ♀も現れる)」

学者「おい! こっから離れよう。また崩れるぞ、これ!」

カナリア「又、死ぬよ! カナリアが、再びの死の香りを、ヒステリックな羽音と共にお伝えします、みんな死ぬ! たくさん死ぬ! 一度に死ぬ!」

埋田「なあ、モグラ長。気持ちには分かるんだけど、急がなきゃいけないみたいなんだよ」

モグラ長「……大丈夫。落ち込んでないっていうか、あれを見て! 穴さえ掘れば全てがつながる。だから、一事が万事全てのモグラ。世界中の地の底にいるありったけのモグラを呼びつけた!」

埋田「暗闇が、突如、生き物の輪郭をなして。うごめき始める!」

堀内「動くものたちは無言で告げる。どこまで掘ればいい？ つーか、めっちゃ穴掘ってもかまわない？」

埋田「うわー、見渡す限りの穴という穴から、モグラが溢れかえっている！」

モグラ長「はい、目盲滅法」

皆「土崩せ」

モグラ長「道はできるよ」

皆「僕らの後に」

モグラ長「一つ掘っては人の為」

皆「一つ掘っては人の為」

モグラ長「嘘だよ、駄目だよ、適当なこと言っちゃ。自分の為に掘らなきゃ、偽善しいしない。自己愛、自己愛」

皆「うーす！」

モグラ長「解散ー。よーし。着いたぞー！」

埋田「あれ」

墓守 a & b 「やあ」

埋田「さらに下に掘ってかないの。みんな行っちゃったよ」

墓守 b 「うん」

墓守 a 「うちらさ、ここに残ってくよ」

埋田「……なんでまた？」

墓守 a 「さつき大勢死んだモグラたちのお墓を作ろうと思う。退屈でも、墓の側で暮らすのが墓守だし」

埋田「あー……、そっか……」

墓守 b 「そう、モグラのだっていっても、お墓はお墓だもんな」

墓守 a 「君の友達の子のお兄さんに教えられたよ」

墓守 b 「たまに訪れてよ。石だって、心無い雨より故人を偲んで流れる涙で泣き濡れたいだろうし」

埋田「地中に雨が降るのか、っていう問題もあると思うけど」

墓守 b 「ま、ね」

埋田「そっか」

墓守 a 「うん。じゃ」

埋田「じゃ。(去る)」

墓守 a 「……そうになると、暇なわけじゃないけど退屈だよな」

墓守 b 「それでこそ墓場、それでこそその墓守！」

墓守 a 「黄色い泉目指したモグラ長、ここいらのミミズには目もくれず」

墓守 b 「死にそびれた男とその一行は、土足でもって、ずかずかと、星の奥へと続く終わりのない梯子を降りていくのだった」

墓守 a 「コール」

墓守 b 「ごめん、ツモった」

墓守 a 「うーわ、スパイはト金に敗けるんだっけ？」

墓守 b 「トイトイ、タンヤオ、ドラ三丁。インパチいえーい」

墓守 a 「もう一回。もう一回」

墓守 b 「…：暇な訳じゃないけど、退屈だな」

埋田 「そうして墓守の二人は、暗闇に消えていった」

皆で穴を掘る。

墓守を残して、暗転していく。

詩人 「すげえ景色だよ」

カナリア 「なんか不気味」

学者 「剥き出しの岩肌、土壁から、無数の化石が突き出してるのである」

墓荒らし 「売ったら結構な値がつきそう。どうなの先生？」

学者 「億はくだらない」

墓荒らし 「億はくだらない！ 鼻血が出そう！」

医者 「ガーゼかそうか？」

蛇 1 & 2 「ゴールが近いんじゃないか？ 覚えているか？」

埋田 「どうよ。何か思い出せそう？」

堀内 「（肩をすくめて）地中に降りるにしたがつて、それはそれは風、穏やかな気持ち
ちになってゆく。上ではもっと、脳に肌につつかれてる感じだった」

埋田 「いまひとつ、意味は分からんが…：。風当たりが和らいだと。まあ、前進して
るって事で良いよな。後退はしてない」

堀内 「悪いね」

埋田 「ん？」

堀内 「なんかわざわざ」

埋田 「いや、俺も気になるしき。ヒマですし」

堀内 「そうか。ん、何、気になる？」

埋田 「だから、色々だよ。死んだ奴が、元気に走り回ってるということ自体が、もう、
すげえ気になる」

堀内 「いや、俺は、そんなに気にならないよ」

埋田 「そりゃ君はな！」

掘り進んでいるうちに、たくさんの化石が現れる。

堀内 「こんなの初めてだ。地の中の水族館の様相」

連れ 「近いんですか？ ゴール」

蛇 1 「さあな。だが、化石に肉つくりや腐乱死体、つまりはゾンビだろう？」

ゾンビ♀ 「こんなのと一緒にすんな」

学者「おや、この化石は肉付きがいいねえ」

医者「でも、所詮は化石に付着し、死して放置された肉だもの。肉とはいえ、もう腐ってボロボロ」

学者「そうだね。学者ジョークだと思ってくれたまえ」

詩人「生きることを忘れた、腐肉の群れが、壁に舞う」

蛇1「うーん。ていうか、ちよっと人数が多いよね」

蛇2「それある。皆ではじめに掘ってる分には便利だったけどね。今は邪魔だよね」

蛇1「だよな。堀内君」

堀内「まあでも、旅は道連れ？ 死出の旅路は一蓮托生？」

蛇2「お前、他の奴ら、殺す気満点かい……」

蛇1「自分はもうゾンビだからって……。意外とワルだな」

堀内「えつ。僕なんか不味いこと言いました？ 実は、人間だった時の常識が、ポコポコ抜けていつている感じで。性根とかも腐ってきましたかね。お恥ずかしい」

埋田「なに話してるんです？」

蛇1「ヒト減らし、間引いてやろうって」

蛇1&2「化石ぐらいなら私たちにも動かせるんだ」

蛇たちの力によって、化石たちが動き始める。

かりそめの命をもらって、動きだす。

カナリア「あつ……。漂う死の匂い、死ぬ、大勢、辺り一面死ぬ、次々と、続々と。後を追うように、泉に飛び込むように、全て死ぬ」

モグラ長「お。何か感じたか？ 皆用心しよう。カナリア、やばくなったらまた詳しく頼むよ」

カナリア「ううん！ 違う。無事なのアタシら、死ぬのはこいつら」

ゾンビ♀「この蠢く化石達が。死ぬ？」

埋田「おい、手も触れず、窟に封じられている筈の化石達が、ズブリズブリ消えていく」

化石たちはかりそめの命をもらったものの、すぐに苦しみだす。

化石たちが、消えていく。

医者「沈んでいる訳ではない。蛇の歩む様を見ているようだ、身体を波打たせ目に見える速さで化石たちが暴れ、もがき、そして消えていく。化石たち、苦しそうな顔を浮かべて泳ぎだす」

カナリア「あれ！ 声が出ない。この子たちのために泣いてあげたいのに。早鐘の拍動をよそに、警笛が、声が出ない」

詩人「どうした」

カナリア「声が出ないの」

詩人「どうして」

カナリア「わかんない！ カナリアはいつもそう。肝心なところではいつも、歌を忘れ、独りで、取り残されるんだ……」

医者「突然、たくさん死を目の当たりにして、ショックを受けている様です」

学者「彼女は、化石という古の死の記憶に巻き込まれ、パニック状態に陥ってしまったっているんだ」

埋田「先生方の所見は？」

医者&学者「この様子では、カナリアは、旅を続けることはできない」

詩人「♪月夜の海に浮かべれば（カナリアの頭をなでながら歌う）」

蛇1「詩人がカナリアの真似事かい」

詩人「やれる事は少ない。出来るかどうかも分からない。ただ、カナリアはいつか、忘れた歌を思い出すと思うんだ……」

医者「理想を語っているのね」

詩人「うん。皆先行つていいよ。この子が歌えるようになるまで、代わりに私が吟じよう。だから、さつさと先に……。ほら死にたがりの、怖い人たち、みんないなくなったから。子守りの歌でも歌おうね。ゆつくりと眠んなさい。母鳥の胸で、生まれる前の卵のように」

蛇2「……蛇に丸呑みされないよう、気をつかったらいい」

堀内「あの二人の気持ちを無駄にしない為にも、張り切って行くぞ！」

埋田「お前は独りでも生きていけるタイプな」

学者「後で役に立つかもしれない、化石の様子、しっかりとメモっとけよ」

ゾンビ♀「はい先生」

詩人「私カナリアは、いつも、いつだって、誰かが死ぬ前にそれを知らせようと真っ先に鳴いた。そして誰かが死んで、今度は悲嘆にくれて真っ先に泣いた。来る日も来る日も、黄色い悲鳴をあげてばかりいました」

カナリア「それから？」

詩人「んーと……」

カナリア「あつそ。あたしつてばその程度かい。寂しいなあ……。あのさ、誰かが土に還って、」

詩人「誰かが土に還って、」

カナリア「すっかり忘れられちゃっても、」

詩人「すっかり忘れ去られても、」

カナリア「その日のことだけは」

詩人「その日のことだけは、忘れることなく、雲のように川の流れのように、心に留めてもらえるように」

カナリア「やればできるんじゃない」

詩人「これからもずっとね、オウム返ししてあげるよ、ずっとね。お前はカナリア、僕はオウム」

カナリア「もっかい眠っていい？」

埋田「そうして詩人とカナリアは、暗闇に消えていった」

皆で穴を掘る。

医者「（地底は空気薄いよ。調子悪い……）はい、ドクターによる定期検診です……」

堀内「頭痛と吐き気とめまいがします」

医者「特に異常なしね。どう？　ちゃんと死ぬそう？」

堀内「いやあ、どうなんですかね。先生から見てもどうなの、俺って」

医者「んー。そうして元気にやつてるからね。脈なし、って事だけは言えるかな」

堀内「なんか、お手数かけます」

医者「いえいえ。じゃあ、今日も少しお話聞いておこうかしら。その脳波の波風立たない頭で、考えてる事を教えて下さい」

堀内「生前はどんな方でしたか……。えーと、真面目で良い奴。で、ちよつと影の薄い人でした。いや、イジメとかじゃないよ。たぶん、地上じゃそんなになつてると思うのですよ。そこに居るんだか、居ないんだか、あやふやめな男。そこから消えても、その場に現れても話題に上りにくい男。雲のようだと誰かが評した。他の誰かは空気のようにだ。いたって、川の流れのような人生と、本人だけは思っていました。雑談であふれ返る雑誌に載ってた雑踏を映す番組捜してザッピング。いつしか、それにも飽きて……。自分の耳から、音が消えると、そのあと孤独が見えてくる。今、この瞬間、俺がこの地上から消え去つても、一体誰が困るんだろうって……。文化祭の前日、大会決勝、締切日ジャスト、外しちゃ行けない会議、向こうのご両親ときあ会おう、お前に居なくなられちゃ、すげー困るんだよって時に限って、そういう事考えますよね」

医者「つまり」

堀内「はい」

医者「不意に消えちやいたくなつて。こんな遠くの村まで来たの」

堀内「そうかも」

医者「しかも、そのまま、死んで消えなくなつちやつたのかな」

堀内「そこは、どうなんですかね。はっきりしない所ですわ。生前、俺ってそんな、繊細なお兄ちゃんだったんですかねえ。ねえ、先生」

医者「さあ。……あのね」

堀内「はい？」

医者「あたしは外科医なの。カウンセリングも、セラピーもだいたいぶ専門外」

堀内「あら、すみません」

医者「まあいいけれど……。気にしすぎ。疲れがたまってるんでしょう、顔色悪いし」

堀内「ですかねえ。なんか、鼻とか耳、すぐ取れるんですよ」

医者「薬出しときましよう」

堀内「……死にたいなんて思ってたなかった。でも消えたいとは、よく考えてた。そんな男だった気がすんですよ……」

医者「へえ、そうなんだ（ちよつと興味を持つて）」

堀内「や、もう憶えてないですけど。腐る前のことは」

医者「え、いまの嘘？」

堀内「いや、嘘つて事はないけれど。なんか、生前、そんな事考えてた男が、ほんとの死に場所求めて、穴掘つて捜すつてのは影があるかなと思つて、でつち上げてみたの」

医者「それを嘘というのだ。葉出さねえぞ」

堀内「あー、葉はいいつすよ。ちよつと相談したかっただけだから」

医者「ふーん。……周りの人間にしてみれば、あなたが死ぬことと、消えることと、受け取る心の動きつてのは実は同じなのね。突然の不在。……死んでしまった男に對してのものと同じ分だけの涙が、永遠に消えてしまった男のためにも、私の頬をつたう……。でもあなたは、あなたつてば、死んだのに、ここに居る。これじゃあ、私たち、安心して泣けない。……何が気になつて戻つてきたの？ 皆が、ちゃあんと、さめざめ泣いてる様を確認に来たの？ だとしたら、随分と淋しがりだと思ふんだけど。あれ……!？」

気付くと、堀内がない。医者、ちよつと驚いて、辺り見回すと、埋田がやつてくる。

医者「あら、あなた」

埋田「はい」

医者「いま、ここに居ない人の事云うのはあれだけど。ていうか、どこかで聞いているかもしれないから、言葉を濁して喋るけれど」

埋田「あれ」

医者「うん。彼つてやつぱり、あれになつてしまつて居るのよね」

埋田「なに？」

医者「あれよ」

埋田「いや、わかんない」

医者「生きて居る人の、反対」

埋田「反対。……ゾンビ？」

医者「（首を振つて。近くに寄つて）……まあいいや、最後だしストレートに言つちやおう。……彼、やつぱ死んで居ると思ふんだよね。あなた、どうするの」

埋田「どうするの、つていきなり言われると……（困惑する）」

医者「……で、私も、実は前から、具合が不養生でして、こちらで、それじゃ」

埋田「えつ。それじゃ」

去つていく……。

埋田「そうして医者は、暗闇に消えていった」

皆で穴を掘る。

墓荒らし「ちよっと自己紹介をひとつ。(咳払い。おっほん)三好氏の臣、石川明石の子で、体幹長大、三十人力を有し、幼い頃から非行を繰り返し、14、15で父母を亡くして天涯孤独。16で主家の宝蔵を破り、番人3人を斬り黄金造りの太刀を奪い、逃れて諸国を放浪し盗みの限りをはたらいた。19の頃にやあ伊賀へ渡って、なんと忍者の弟子になり、それから京を出、天下に聞こえる大盗賊となった。あたしの辞世の句がまた凄いい、処刑の前にコレ、「石川や 浜の真砂は 尽きるとも 世に盗人の種は 尽きまじ」(たとえ砂浜の砂が無くなるようなことがあつたとしても、盗人は世の中からは消えないだろう)。痺れるねえ。一番格好いい瞬間はコレ。煙管片手に、「絶景かな、絶景かな。春の宵は値千両とは、小せえ、小せえ。この五右衛門の目からは、値万両、万々両……」って、嘘だ……。これ天下の大盗賊、石川五右衛門の紹介文だ！……あたしは単に、ケチな泥棒、墓暴き専門の女。……まあ、見ため海の向こうの冒険家みたいになってますけど」

女の格好はどうみても、インディー・ジョーンズっぽい。または、映画センター・オブ・ジ・アースの教授のよう。

ゾンビ♀「怪しいっぽい人、はっけーん」

墓荒らし「ビクウ！ ドキイ！」

ゾンビ♀「大丈夫」

墓荒らし「……。あつ、大丈夫。もう平気、凄いで胸ないので、後ろから来られると……。……もう大丈夫」

ゾンビ♀「あ。よかった」

墓荒らし「(ここで初めて後ろを向いて、ゾンビ♀を見る)うわあああ！ ちよ、こわ……。何それー！ ぐるぐる巻きーッ！？ (物凄いいおびえる)」

ゾンビ♀は包帯を全身に巻いて、ミイラのような格好で現れていたのだった。

墓荒らしはおそるおそる、包帯をほどいてみる。ゾンビ♀の顔が現れてちよっと安心。

墓荒らし「ああ。学者先生といつも一緒にいる子か……」

ゾンビ♀「おどかしちゃったか」

墓荒らし「うん……」

ゾンビ♀「こういう人、いっぱいいたよ。キラキラの石が詰まった箱でみんな寝てた」

墓荒らし「お宝！？ 棺おけ一杯の宝石とミイラ。王家の宝！？」

ゾンビ♀「かも」

墓荒らし「ちよっと案内！……！」

効果音。宝石がたくさんの音。「キラキラーン」または「ジャラリーン！」など鳴る。

墓荒らし「どンドン、袋に詰めてっつね！」

と、ゾンビ♀は墓暴きの手を止める。

ミイラになっているヒトの一人を見つけて驚いている。

何と、このミイラ、ゾンビ♀の知り合いだったようだ。

ゾンビ♀「あつ、嘘、このコ知ってる」

墓荒らし「このミイラのコ？」

ゾンビ♀「うん、昔の友達……。あたしが生きてたトキの友達だわよ……」

墓荒らし「うっそ、こんな……。すごい偶然……。てーか。アンタ、2500年前から生きてたんだ……」

ゾンビ♀「やっぱやめよ。これさ、お墓、元に戻そう？」

墓荒らし「え、そんな」

ゾンビ♀「包帯も、巻いて巻いて、ぐるぐるー。こんなか？ あれ、足んない、お尻出ちゃったよ」

墓荒らし「待って待って、戻すのナシー……」

「泥棒してるんだからー！」「やっぱダメー！」「なんでー!?」「なんでもー！」とケンカ。どこか、おまぬけ。ノー天気な感じである！

二人ケンカを止める。

大きな音が、向こうから近付いてきたからである。

二人「待って、何この音!？」

埋田「解説しよう！ 墓荒らしとゾンビちゃん、二人が耳にした忍び寄る轟音の正体、それは、通路いっぱい凶悪な転がる巨石であったのだ、なんだあの巨大な石ころー!!! こっち向かってゴゴゴーツ！ てくるよ。慌てて、ゾンビちゃんの手を取って逃げる墓荒らし！ この時、ゾンビちゃんの腕がもげなかったのは、誠に僥倖と言えましよう」

埋田、小さな模型で実況中継している。ちとおバカな感じ。

墓荒らし「ゾンビちゃん、その細道に逃げ込みな……」

ゾンビ♀「うん。あ、でも、このコ持っていないと、石でこのコ、ペチャンコ……」
墓荒らし「いいから早く……! もう目の前までー」

かろうじて助かりそうな細い穴へ、ゾンビちゃんだけ入る。

墓荒らし「うわ! 石、こっちに来た……!」

埋田「そう。ゾンビちゃんの逃げ込んだ細道のほうが正解！ ゾンビちゃんは古の友達を助けたせいで、正しい細道を引き当てた！！ 墓荒らしの元へ迫りくる巨石！！ 逃げ場なし！！ と、そこへ第3の登場人物が！！」

学者「(両手合せお祈り) 失礼します、つと。包帯ぐるぐる巻き取って。文字も書いてある貴重な資料だわっほい。この宝石も宝剣も貴重な資料、すべて持ち帰ろう。そして売却、研究費ウハウハ。知性がきらめくね！！ な、袋小路の私の元へ……ウワー！ 凶悪な巨石が！？」

埋田はまた、ミニチュアで図解しながら。

埋田「そうなのです。今は、こんな状態。二股に分かれた袋小路の二本道、道いっばいにやってくる凶悪な巨石。墓荒らしか、学者先生どちらかが死んでしまう。細道に逃げ込んだゾンビちゃん、足元に突き出したレバーを発見！ どう見ても、石の方向転換指示器！！ どちらを救い、どちらに石を転がすか、究極の選択です。墓荒らしか、先生か！！」

迷って、ゾンビちゃんレバーを倒す。石は墓荒らしのほうへー。石は、サイゴまで転がり、ズシン……！ と止まった。

墓荒らし「こんにやろ。ゾンビちゃんめ、あたしを見捨ててセンサーを取ったな22く！！ (石のすき間で、ギリギリのポーズで生き残ることができていた！！) 仕方ないか。師弟愛に免じて許したげよう。さて、このヨガみたいなポーズから、どうしたものか……。つて、うわ、ラッキー、すぐ傍に小さな横道発見！！ くぐって中を見ると……！！ 水晶の王国だ……！！ 光り輝く水晶の一本道が続いている。あきらめないよ。私、意外とタフなんだから、だいいち、けっこう楽天的なんだ！！ ……向こうから風が吹いている。光の先は、きつと地上だね、お宝拾いながら……、この道を一人辿って行こう」

ゾンビ♀「先生、これは全部置いてく」

学者「研究材料」

ゾンビ♀「ダメ」

学者「そうだな。また王家の呪いで、トラップにせめ立てられるもんな。王家丸ごと死者の墓を暴くのは流石に礼を失した行為か。王家の呪いってのは、誠にしつこいものだからな。墓を暴いた者を、そうそう簡単には許してはくれない。ま、我々は、堀内くんの墓をえんえん暴いてるんだけども。戻るか、堀内君の元へ」

埋田「そうして墓荒らしは、幻の宝玉を目指し、暗闇に消えていった」

皆で穴を掘る。

さらに下へと掘り進む一行。モノリス？ の様な黒く巨大な石版が、再び幾つも掘り起こされだす。

堀内「そこで俺は、この穴掘り道中、二度目の墓石を見つけることになる」

モグラ長「あ、見つけた？ じゃあ、ここまでだね」

蛇1&2「墓石は、地中に、二度現れる」

学者「それも、下から伸びてくる」

埋田「埋もれたんじゃない、この石は……、生えてきてるんだ。きつと、これが印だよ。黄色い泉の道行き示す、彼の地へ向かう死の名残記した、墓場のオブジェ」

堀内「どこから生えてきた」

ゾンビ♀「さあね、地獄？」

堀内「誰のものだ」

ゾンビ♀「さあね、神様？」

堀内「お前、俺に冷たいな」

ゾンビ♀「ふん！ そんなことない。自分はどう感じてるの」

堀内「俺は、この石のある先、その真下からやって来た気がする……！！」

モグラ長「これ以上、下には掘れない、掘ったことが無い」

堀内「今生の別れ迎えかけた、あの片身、取り返しつけるために。行こう」

モグラ長「この墓石を抜くことは、まず間違いない崩れるぞ」

埋田「ああ。そういうことね……」

モグラ長「わかって言ってるんだと思うけど。一度崩れたら二度と戻れないから」

堀内「……それはいいよ。取敢えず、地の底に着いてから考えようや。今戻ったら、何の為にこんな奥底まで来たのかわからない。違うかな！」

埋田「お前はやはり、地の底に行きたいんだな」

堀内「（ゆっくりと考えてから、うなずく）ああ、すまん遠くまで、埋田」

埋田「連れていくのは構わない。ここまで来たら……」

堀内「いいのか」

埋田「……いいよ」

学者「この真下。あと少し。何かなければ、こいつは（ゾンビは）出てこない！」

蛇1「じゃあ行こうか、どれ程ねじれようが構わない」

蛇2「闇雲なその蛇行の果てに」

埋田「彼の望む所、辿り着いてみよう。頼むよ、モグラ」

モグラ長を残して、皆いなくなる。

モグラ長「……堅い岩崩す時は慎重に。土掻き分けるときは大胆に。あれ、他の奴らはどこ行った？ まあいい。いつも、モグラが気にするのは、眼前の壁と見まごう土のかたまり。でも、どれだけ頑張っても、賞賛のテープも切れない、目的地がない。

強いて云うなら、この一掻きが人生のゴール。終わってる？ 終わってない。まだ掘れるでしょう。……おい。ホントに他の奴、何処行った」

ヒト「自分が、間違った所を掘っているとは思わない？ (よく聞くと、蛇の声にも聞こえる……)」

モグラ長「さあ。いや、堅いなしかし」

ヒト「自分だけが、はぐれてしまったって」

モグラ長「なんかのつぺりとした堅い壁に当たる。急に進めなくなった」

ヒト「お前が最後の一匹なんだよ」

モグラ長「え」

ヒト「あとは、みな死んだ」

モグラ長「気づかなかった」

ヒト「道すがら景色を愉しむ余裕すらなかったものね。お前は」

モグラ長「ないよ。景色など」

ヒト「まあね。じゃあ、後ろを振り返ったことも無いだろう。おまえ自身が作った道のりも」

モグラ長「後からついて来る奴がいれば、道は確かに存在するのさ。わざわざ振り返らずとも」

ヒト「お前が最後の一匹なんだよ」

モグラ長「いくらか蛇行したかもしれないが、ちゃんと掘り進んでいる」

ヒト「どこへ？」

モグラ長「……答え出すときりがない。いつだって暗闇はすぐさま調子に乗るものだ。24
気にせず先へ。……またぶつかる」

ヒト「たとえば、そう、蛇行の限りを尽くしたお前の道行きが、終には星をねじれた形で一周し、この目の前の扉開いて繋がってしまうというのは」

モグラ長「再び立ちはだかる、この壁の向こう？」

ヒト「現れるのが、お前の背中だとしたら」

モグラ長「俺が俺に出会う。そりゃ……、死ぬね」

ヒト「ああ、死ぬだろうな。もう一人の自分と出会ってしまった者は死ぬと相場が決まっている。可哀そうなウロボロスだよ、自分の尻尾飲み込んで、息も絶え絶えの地を這う生き物」

モグラ長「地中を進む生き物だ。しかもモグラだ。一緒にするな」

ヒト「一緒だよ、罪深い生き物」

モグラ長「何もしてない」

ヒト「何もしてないからさ」

モグラ長「モグラは哲学をやらないぞ」

ヒト「知ってるよ」

モグラ長「気にせず、先へ。……また、ぶつかる。今度は何だ」

ヒト「……ふふ……はは……」

モグラ長「喋らないのか、蛇の誘惑。悪魔の囁き。さすがに分かった。お前は、俺に後ろを振り返らせたいのだろう」

ヒト「頭の切れるモグラなど、長生きしないぞ。モグラのように生きてりや、それでいいんだ」

モグラ長「うるさい。気にするな、先へ。……又ぶつかる。休憩だ。……あまりにも暗闇、終わりの無い沈黙、後ろに無限に伸びる一本道。……一体何をしているのだろう、俺は。向かう所、敵も味方も誰も彼も無く、そもそも広がる景色もなく。駄目だ。どうしようもなく、後ろを振り返りたい……」

学者「(別の場所)この一節。この石版に書かれるその内容さえ判れば、その隙間、地の奥の細道が知れるのに」

ゾンビ♀「前から云いたかったんだけど、これさ……。あたし、読める……」
皆「絶句……」

ゾンビ♀「ういゝ?? はえゝゝ??」

学者「阿呆か……。なぜ早く言わなかった」

ゾンビ♀「だって怒られるかと思っただもん」

学者「輪をかけて阿呆か……。逆だ、ほめちぎるわ……」

ゾンビ♀「チーッ! もっと早く、言っときゃよかった……」

モグラ長「わかってるんだ。背中に広がる景色は、黄泉の国なのだとも」

堀内「あと、俺にも読めるよ」

埋田「それはつまり……」

モグラ長「背後で待つ仲間が腐れている、とも(また壁にぶつかる)」

蛇1&2「先のことが見えないお前も、わかるだろう。振り返らなければ終わらない」²⁵

モグラ長「そう、ずっと掘り終わらない。地上でどれ程の者々が生まれ滅びようと、それが一瞬のことにしか感じられない、それが地の底の永遠。風も吹かない、日も昇らない、何かが育つこともない。ここは、ただ死んでゆくための世界だ。俺たちはそこで生きる寂しい生き物だ。ずっと終わらないから、今、掘るのをやめよう。(ひと吠えして、体当たりする)ちよつと癪だったんで思いつきり体当たりして、俺はそれから、壁の前でひっくり返る」

埋田「それはつまり、死者への嘆きが……、この板一面に、彫り込まれているというわけだな」

学者「分かったぞ。きつとこれは、ゾンビが出てくるお墓の、墓石だ」

ゾンビ♀「学会に発表ですね!」

学者「(うなずいて)この文字が読める時、そいつはもうすでに死者なのだ」

埋田「そうしてモグラ長は、ずっと我々のために穴を掘ってくれたあと、どこかで暗闇に消えていく」

モグラ長「(起き上がってふと板を見て、気が付く)板の表面、今まで俺の削り出した引つ掻き傷だとばかり思っていたものが、急にくつきりと文字の並びに見え出してしまった。それから俺はむくつと身体を起こし、ゆっくりとした、けれども無駄の無い動作でもって、壁の脇に小さな、俺の身体がすっぽりと納まるだけの穴を掘った。

自分だけの為に穴を掘った。そんなことしたのははじめてだった。そして俺は、そこに身を横たえた。暗闇が四方から身体を覆い始めた」

生き残っている全員が、それぞれ別の場所で、地中の穴から顔を出す。

地中を下へ下へと突き進んでいたのに、まるで地上のような、広大な地底空間に現れてしまった。

堀内「ここは一体何処なんだ？」

皆「どこなんだ？」

埋田「ものすごうく、長く長いこと地中を掘り進んでいたら。地の底に見知らぬ、天地が逆さまで広大な世界を見つけました！」

堀内「その世界の主を捜そう！」

埋田「ですよね！」

二人「その世界はあらゆる生き物が奇妙な生のルールに従わされて暮らしていた。まだ世界が薄暗い時分、墓地から彼らの生声はあがる。(ゾンビが山ほど現れる) 生前のきつと多くの名声を刻んだ墓石をへし折って。あやふやな足取りで。山を谷を徘徊。世界が随分と明るくなる。彼らの大部分は辛そうだ。匂いもきつい。すこし、身体にポロが出る。それでも歩みを止めない。うろつくのが目的なのか、嘘つくのが目的なのか。顔が僅かに憂いのある表情となった気がするのは気のせいか。顔自体が、ますます崩れているので分からない。日が暮れ始める。ゆつたりとした足取りで、墓地へと向かう彼ら。自分が湧いて出たところかどうかは問題ではないらしい」

堀内「地の底にふさわしい暗闇で、覆われる頃には」

埋田「その世界の住人達は、墓標の前の土くれに戻ってしまったている。これは……」

堀内「俺の世界だ」

埋田「ゾンビの国だ！」

ゾンビ達低く唸る。そして近づいてくる、逃げ惑う内、二人はバラバラにはぐれてしまふ。

ゾンビと化したキャラクターたち。またもやジャクソン5の曲に合わせ、ゾンビ風のステップのダンスを踊ります！

蛇1&2「くだらねえ、ゾンビの群れに囲まれて」

埋田「気付いたらバラバラなんってる。……他の奴ら何処だ？」

堀内「走るしかねえか。走れっかなあ」

墓荒らし「なんか人数減って身軽になったね」

学者「よーし、リーダーは俺、ついて来い！ ありや」

ゾンビ♀&墓荒らし「先生、遅い。置いてくよっ(ゾンビ達の間を各々が走り抜ける)」

モグラ長「一つ掘っては人の為、一つ掘っては人の為。目暗滅法俺の為、目暗滅法俺の為。(ゾンビと化している)」

ゾンビ「相変わらず掘ってんなー」

悪魔「さつき死んだ奴らも、早速ゾンビになって登場か」
連れ「何か大変なとこ来ちゃったなー。あいつどこだよ、って、周りは全員ゾンビだらけ。あいつ、見分けづれえ！」

天女「何も落としてない癖に、私を呼ぶのは、誰ですか？」

悪魔「ああん、こっちの台詞だろ。お前他所もんだな」

天女「ああん、こっちの台詞よ。あんた他所もんね」

天女「お帰りなさい。よく還ってきてくれました」

天女「あなたは、この方の連れの、生きてる方。ようこそ、ゾンビの世界へ」
連れ「そうそう、そうだよ、ここはゾンビ達の世界じゃないか」

天女「ええ。蛇のように絡まり環になった死人の意識の果てに、思い出せませんか？
あなたがここから巣立っていったこと」

ゾンビ「あ！…？わかんねえ」

連れ「お前ここの生まれ？」

ゾンビ「だったら。俺が置き去りにしたこの片身、返してくれよ」

天女「え？」

ゾンビ「え？」

天女「それが…：梯子に手を掛け地表に至る、貴方から手放された片身は、音もなくその泉の遥へ。(落っことしてしまいました)」

ゾンビ♀「先生、こんな悪魔に耳を貸しちゃ駄目」

学者「耳じゃない、知恵を借りたんだよ。君のおかげで素晴らしい土地に至り、素晴らしい発見が出来そうだよ」

ゾンビ♀「先生、危なげ」

悪魔「あんたのおかげでここまで来れた。結局ここは間違えられた世界だった訳だが」
学者「悪魔の知恵持つ双頭の蛇。彼を囲んで二人で、お互いに巧くやれたじゃないか」
悪魔「悪魔の知恵持つ双頭の蛇。だがもう用はない、頭は一つで」

ゾンビ♀「腐って饜えた(すえた) 訳じゃない、けれども同じ死者の気配」

悪魔「だから、この細腕が翼に転じ、空を仰ぐ。(地獄の底の化物の様な姿へと、戻ってゆく)」

学者「あっ」

ゾンビ♀「先生と対にゾンビをそそのかした男！ けれど、学者がこの悪魔に対にされただけの話だった！」

学者「あいつ本物だった、あいつ本物だった」

ゾンビ♀「ちつとも恐ろしくはなかった。だからかえって、あいつが一方的に恐ろしい」

学者「あわわわわわわ」

ゾンビ♀「先生、生きてんだから腰抜かさない。逃げるよ。行くよ」

悪魔「ああ。もう用は無い。そっちだ」
学者「はい！」

ゾンビ♀「先生、私も。えっ！（土砂崩れに遭う二人。岩が降って来る。落盤。かすかにゾンビ♀が学者を庇ったか？ ゾンビ♀の体、一枚の岩に截たれ、上下に分断される。埃がおさまる）」

学者「お前、大変なことになってんぞ」

ゾンビ♀「先生、私の。脚は？」

学者「ここ。……喋んなくていいから。死んじまう」

ゾンビ♀「喋れるから。死にきてないから」

学者「だって下半身モゲてんよ」

ゾンビ♀「派手を除けば、いつものことじゃない？」

学者「いや、そんなことは（無いだろ）。だって」

ゾンビ♀「アタシ、ゾンビだから」

学者「だってお前、半分なっちゃって」

ゾンビ♀「アタシゾンビだから！」

学者「あ。……そっか」

ゾンビ♀「ね。死なないから、死ねないから。」

学者「そうだよな。別に名前とか呼び名じゃないよな、ゾンビって」

ゾンビ♀「死なないから、死ねないから、……ねえ、下半分」

学者「ああ。くつつけなきやな。ここを離れることもできない」

ゾンビ♀「こんなに派手なのは初めてだから。くつつかないかもしれないけど」

学者「さつさとくつつけて地上に帰んなきゃ。学会が私を待ってる」

ゾンビ♀「ヤー。……てか追い出されたじゃん」

悪魔「ここに決めた！よし、あと、思いだした人を惑わす蛇の仕事。耳元、ささやくのが仕事。」

連れ「地の上の、積み上げられたたった一つの墓場から飛び降りて」

ゾンビ「ああ。長いこと来たよな。一体この落下点には何があるんだろうな」

連れ「あるさ。必ず何かがある。」

連れ「うん。そう、お前は死んでるんだよ、やっぱり。 （ついに、意を決して言う）
てみる」

ゾンビ「うん」

連れ「で、まあ……こんな狭間に降りてきたと」

堀内（埋田の背後から）、埋田に近寄っていく。まさに囁かんとした時に、意を決した埋田が堀内の背後に回る。

連れ「お前をここに、置き去りにしていくよ。 (先回りして、堀内へ告げる。言っ
てしまった後、後悔)」

ゾンビ、満足げに笑む。そして、自ら、ひとつの意思を告げる。

ゾンビ「俺を、ここに置いて行ってくれまいか」

連れ「・・・それを、云わせない旅だった。

ゾンビ「まあ、一人でなんとかやっていくよ。時間だけはたっぷりあるみたいだし。
忘れ去って君は街で暮らせ。もしも又、こちらの世界で出会えたら……」

連れ「……」

ゾンビ「止そう。朽ちた体の死人に口無しだ」

埋田、街へと帰っていく。人々の中に暮らす事を選ぶ。

ゾンビ「それはそれは風、穏やかな気持ちになってゆく。 (誰に言うでもなく)」

堀内はゾンビとなり死ぬ事はない。(意識の無くなる事はない)
けれど、地上に上がる事もできない。

つまり、死後も意識が続くとして、にもかかわらず、天国やあちらの世界など存在し
ないとするなら、……あの世の世界では、この男の様に暮らしてしまうのではあるま
いか。

もし、本当にそうであつたら、とてつもなく恐ろしいことだが。

そうした思いを、ここまでの経緯とこの無言のシーンで伝えたい。

煙草を吸う真似をしたり、周りを見渡したり、冗談めかして再び階段を昇るフリ、を
してみたり。

やがて、何もする事が無くなる。本当に、堀内は永遠にこのままなのだ、という事を
観客嫌というほど感じた所で、ゆっくりとゆっくりと、彼の体の回りを、暗闇が覆う
様にして、暗転。

了

ゾンビ♀「あ、先生まーたさぼってる」

学者「うん、まあ。な」

ゾンビ♀「あ？」

学者「それでどうなんだ。お前の眠らされた場所は」

悪魔「お前の目覚めた場所は。どうだ？ 其処が分かりや良い。底が、蛇の探す死者の国だ。案内しろよ、ほら、」

悪魔学者「もつと下か？」

ゾンビ♀「ちよつ、ゾンビだからつて除け者か！ 先生もそんな奴構つてないで。ゾンビ調べたきやあたしがいるじゃない」

ゾンビ「ああ、なんか人気者で困ったなあ」

連れ「生前はどうだっけかな」

悪魔「過去はいい。ゾンビのお前に、」

学者「天女のいた場所、死者だらけの国を、垣間見たお前が必要なんだ」

ゾンビ「ああ、なんか人気者で困ったなあ」

ゾンビ♀「ふざけんじやないわよ。こつちは何年ゾンビやつてると思つてんのよ。玉のお肌が泣いて嗤うわよ。(わらう)」

学者「ええつ。何怒つてんだよ」

ゾンビ♀「あたしは先生の何なのさ、茶もくむ荷も運ぶ資料も整理する、」

学者「助かつてるよ、感謝してる」

ゾンビ♀「違う、感謝してるのは私。右も左もわからずに、草むらふらつきネズミと床に着いたてた私を、拾ってくれた。で、何で今更コイツなのよ」

学者「だから、そう云うんじゃないんだ。しかも今はそう云うことじゃないだろ」

ゾンビ♀「どう云うことなのよ」

悪魔「お前じや役に立たないことは立証したる？はるか昔に」

ゾンビ♀「あたしは必要ないってか？」

ゾンビ「けんかはやめて、私のために争わないで」

ゾンビ♀「お前先生に近づくな」

悪魔「放つとくぞ」

連れ「ゾンビちゃんはこんなに自我はつきりしてるのに、コイツは何でこんなにぐだぐだなんだ」

学者「だから君の力が必要なんじゃないか」

連れ「だから何で俺？ てか時々こいつ見ると愛想尽きそうになるっす」

ゾンビ「おい。俺を見放すな」

悪魔「はいはい、お前には俺がついてるから」

学者「はいはい、お前には私がついてるから」

ゾンビ♀「先生」

学者「はいはい、お前にも私がついてるから」

詩人「そこー、休んでないで」

悪魔「あちゃー」

学者「ちっ、だべつてたら。見つかっちゃまったろ」

医者「てか先生に見てもらいたい物発見ー」